

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「歯の神様のはなし」

「うわっっ、痛たたた！」突然その痛みはやってきました。左下の奥歯です。虫歯の治療が完治したはずなのですが、まさに魔女の一撃！

「歯科へ行けばいいねかね」と言われそうですが、そうもいきません。この原稿の締め切りはある、明日講義はある、しかも真夜中まだ暗い。なんといっても、歯科は怖い。痛い。麻酔の注射はもっと怖い。以前も、何度かこの一撃を体験したのですが、結局原因がはっきりしないで、削ってみたり、詰めたものを、また取ってみたりで、なにやら年度末の道路工事のように、削る、埋める、また削る、取る、詰めるを繰り返しているうちに、痛みも消えてめでたし、めでたし、でここまで来たのでした。

そうはいつても、この痛みで朝まで眠れそうにもありません。そんなときこそ、困った時の神頼み、幸い新潟県には、神社本庁調べ（平成22年）では4755もの神社があり、なんと全国ナンバーワンの神社王国。トイレの神様もいらっしゃるくらいですもの、八百万の神様のなかに、歯の神様もいらっしゃるに違いありません。ついでに、歯科医師の数も全国で5本の指に入るため（人口10万人当たり79.6人に換算、平成22年）、どこかに、救いの神がいるはずです。

そこで、痛みをこらえて、わざわざ仕事場の書棚まで行って取材ノートを引っ張り出し、古い資料を探すと約30分、ありました、ありました。旧安塚町（現上越市）白山権現様が。なんでも、昔むかし、歯痛に苦しんだ者が、ここの湧水で口をゆすいだところ、あら不思議、痛みが治ってこりゃまためでたい、というのです。それにしても、安塚はここからは遠すぎます。もっと近くは？とみれば、旧巻

町（現新潟市）に歯痛地蔵が。その近くの旧湯東村にも歯痛止め地蔵がいらっしゃいます。しかし、この真夜中部屋着にガウンをひっかけ現地へ赴き、こっそり地蔵さんに手を合わせては丑の刻まいるみたいで怪しすぎます。故に断念。

仕方なくさらに調べていくと、安塚の権現様のように全国にある白山神社が、どうやら歯の神様ようです。なぜ、白山様が歯の神様か？それは、「はくさん」を「歯(は)瘡(くさ)」（一説には腐とも）にかけたしゃれっけ（というと神様に悪いかもしれませんが）のある解釈からです。それこそ今なら、ダジャレでハハハと笑われそうですが、この歯の神様信仰が盛んになったのは江戸時代中期ころ。今の歯科医にあたる職は「口中医」といわれ、一部の上流階級しかかかることができなかったといわれます。庶民や地方に住む者は、歯痛は、じっとこらえるか、草木や水の民間治療しかなかったのです。自己流で治療して命を落としたこともあったとも言われています。そこで生まれた庶民の知恵、苦しい時の神頼み、歯の神様信仰です。新潟県は各地に白山神社がありますから、地域ごとに歯の神様がいらっしゃったかもしれません。私も明日にでも新潟市の総鎮守白山様にお参りにいこうと思います。と筆をすすめているうちに、歯の痛みもころなしに薄らいで慣れてきたようです。やはり神様はここにもいらっしゃいました。

（註 決して読者の皆さまは筆者のマネをしないように、歯痛はもよりの歯科医へどうぞ）

